

バラのアーチング法に関する研究

第2報 栽植密度が採花本数、切り花形質に及ぼす影響

力徳昌史・石松敏樹 (大分県温泉熱花き研究指導センター)

Masashi RIKITOKU and Toshiki ISHIMATSU: Studies on the 'Arching' method of rose pruning 2. Effects of planting density on the yield and quality of cut flower

バラのアーチング法において、第1報では定植1年目は押し木苗、接ぎ木苗のどちらでも栽培可能なこと、栽植密度は9株/マットが良いことを報告した。本報では、新たに密度の低い区を加え、栽植密度が採花本数、切り花形質に及ぼす2年目の影響を検討した。

1. 材料及び方法

‘ローテローゼ’の接ぎ木苗を用い1区4マットで行った。1991年5月に定植し、1992年6月末まで採花を続けた株を用い、9月17日に最終折り曲げをして、供試した。栽植密度をマット当たりの株数で4株(4株区)、6株(6株区)、9株(9株区)、14株(14株区)、18株(18株区)とした。マットはベンチ上に2列並べ、隣接するベンチの中央間隔を約165cmとし、約4.4マット/3.3㎡の密度に設置した。調査は1992年10月27日から1993年6月30日の間行った。

2. 結果及び考察

採花本数はマット当たりでは6株区で最も多く64.8本となり、次いで4株区で、14株区が最も少なかった。6株区を100とした場合、14株区は82となり、マット当たりの差はあまり大きくなかった。1株当たりでは4株区が最も多く15.6本となり、18株区が少なかった。4株区は18株区の約5倍の採花本数となった。切り花諸形質では、切り花長は4株区が最も長く、6株区、9株区、18株区

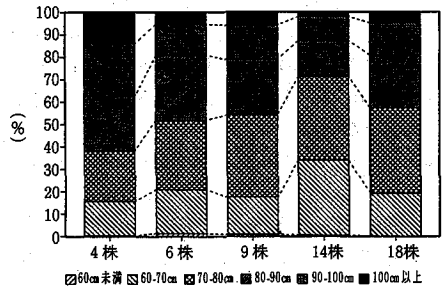
はほぼ同等、14株区は短かった。切り花重、茎径、花蕾長、節数、葉長はともにほぼ同じ傾向がみられ、4株区が大きく、栽植密度が高まるにつれて小さくなった(第1表)。時期別に採花本数を見ると、4株区、6株区は他の区に比較して各期ともに平均的に採花でき、ほぼ同等の採花本数であった。また、この採花期間の範囲では最も光線量の多い5-6月期には9株区、18株区の採花本数の増加が目立った(第1図)。切り花長の分布割合では、4株区が長いものの割合が高く、各層の切り花が平均的に採花でき、14株を除き密度が高まるにつれ、短いものの割合が高まった(第2図)。1、2年目の最も良かった区を比較すると、2年目は採花本数が約40%増加し、切り花諸形質はほぼ同等であった(第3図)。2年目の採花終了時の枯死株は4、6株区には無かったが、9株以上の区で発生し、18株区では25%に達した。

以上の結果、アーチング法における2年目の栽植密度は、単位面積当たりの採花本数に対して影響は少ないが、切り花形質には大きく影響し、マット当たり4株または6株植え、つまりa当たり530~790株程度が適当と考えられた。

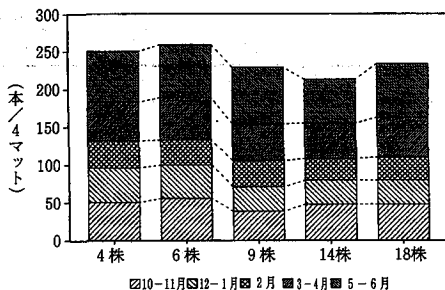
第1表 栽植密度が採花本数・切り花諸形質に及ぼす影響

区	採花本数		切り花諸形質					
	マット	株	切り花長	切り花重	茎径 ^{a)}	花蕾長	節数	葉長 ^{b)}
	本	本	cm	g	mm	mm	mm	cm
4株	62.5	15.6	84.4a	44.0a	6.3a	47.1a	13.0a	17.8a
6株	64.8	10.8	80.3b	39.7b	6.0b	46.2b	12.3b	17.7a
9株	57.3	6.4	80.0b	37.9b	5.8bc	45.9b	11.9c	17.7a
14株	53.3	3.8	75.7c	33.6c	5.5d	45.5b	11.3d	17.2b
18株	58.5	3.3	79.7d	34.9c	5.7c	45.8b	11.9bc	17.2b
LSD(0.05)			2.09	2.61	0.20	0.70	0.41	0.37

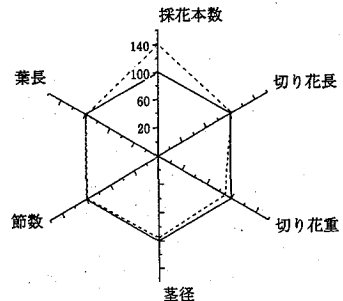
注) a) 切り口 b) 最上位の5枚葉



第2図 切り花長の分布割合



第1図 時期別採花本数



第3図 1、2年目の比較